

秋大医学部サークル

約八割の医師は外国人患者の診療経験があるものの、今後も積極的に受け入れようという医師は四人に一人。そして診療のネックとなるのは言葉。秋田大医学部の学生サークル

「国際医療交流会」（千野佳恵会長）が、昨年暮れから県内の医師を対象に行った「外国人患者の受け入れに関するアンケート」で、こんな結果がまとまった。県内でも在日外国人の増加に伴い、医療機関の利用が増えているとみられ、「言葉の壁や医療費負担の問題を解決するため、外国人向けの医療情報センターが必要」と同会は指摘している。

言葉や費用負担 診療のネック

外国人患者の診療経験 県内医師にアンケート



県内医療機関「思わない」が五十六人
関の在日外国人患者受見が上回った。しかし「通
け入れのためには拒まない」とする医師
を進めていも多かった。

困った点として、やはり言葉の壁を挙げる医師が多かった。「患者の症状を理解できない」「薬の説明が

多い通訳派遣の要望

同会は秋田大医学部生十五人のサークル。東京で在日外国人の医療相談、医療機関の紹介などを行って

人が七十八人と回答者の半数以上を占めた。しかし百人以上という「ベテラン」医師も三人いた。

るアジア医師連絡協議会日本語力では、「片言または日常会話程度の英語」とする人が大部分。英語以外ではドイツ語、留学生の多い中国語、フランス語などが

患者の国籍別に診療経験（複数回答）をみるとアメリカ人を診療したことがある医師が五十九人、中国四十九人、フィリピン四十七人と、これら三カ国が群を抜いて多かった。アジア、

プを受けて実施。質問内容は医師の語学力、外国人患者の診療経験、診療の際の

除く世界各地の計四十四カ国・地域の名が挙がった。外国人患者の診療の際、